

聖書:使徒の働き13章13～26節

説教:ダビデの子孫から

はじめに

イエスが天に上げられるとき弟子たちに言われたことはこのようなものでした。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。」その約束のとおりペンテコステの日に聖霊が降り、多くのユダヤ教徒が救われ、教会が建てられました。おもしろくないのはユダヤ教の指導者たちです。いろいろな手段を使って教会をつぶそうとする。その迫害運動の先頭に立っていたのがサウロ（後のパウロ）です。次々とクリスチャンを捕まえて牢に投げ込んでいきます。ところが彼はあるとき、まぶしい光に照らされ、突然目が見えなくなり、何もできなくなってしまいます。そんなとき主からの語りかけを聞いたことから、回心してクリスチャンとなるという劇的な経験をいたします。

やがて教会に受け入れられたパウロは、それからおよそ十数年後に、バルナバとともに宣教師として派遣されるていきます。まず最初は、地中海に浮かぶキプロス島に向かい、いろいろ妨害を受けながらも、地方総督に福音を語る事ができた。それが前回までのあらすじでした。

## 1 キプロス島からピシディアのアンティオキアへ

### 1) ヨハネ（マルコ）は帰ってしまった

彼らはキプロス島から再び船に乗り海を渡ってペルゲという港に上陸します。ところがそこで、ヨハネがエルサレムに帰ってしまいます。このヨハネは別名をマルコと言い、あのマルコの福音書を書いた人だと言われます。パウロたちとの間で何かトラブルがあったようなのですが、詳しくは分かりません。このことがあったので、パウロはこのヨハネに対して不信感を持つようになったと、15章の所に書いています。

彼らは聖霊の働きによって教会から祈りとともに送り出されました。それなのに仲違いのようなことがどうして起こるのだろうか、と不思議に思うかもしれません。神に選ばれて使徒と呼ばれる人たちだから完全であったのではない。彼らも罪人です。意見の対立もあれば信仰が弱くなることもある。聖書はマイナスと思えるようなこともそのまま書きます。普通なら都合の悪いことは書かずに、よいことだけを書く。それが世の組織がすることです。しかし聖書は違います。使徒たちの弱さもそのまま

書く。彼らが弱いから伝道が進まなかった、のではない。たとえ弱いところがあろうとも欠点があろうとも、福音を世の人たちに届けるという神のご計画は揺るぎません。

## 2) ユダヤ人たちの会堂

さて二人はペルゲから、ピシディアのアンティオキアに向かいます。この町は今のトルコ共和国に位置しております。当時、地中海沿岸にはユダヤ人たちが移り住んでいましたから、この町にもそのような人々が沢山いた。安息日には会堂に集まり礼拝をしています。二人はその会堂に向かいました。もちろんユダヤ教徒に戻ったのではない。ユダヤ教の人たちに伝道するためです。そのことがどれほど大変なことであったのか少し考えてみてください。というのは、先ほど申したとおりに、ユダヤ教の指導者はキリストの教会を目の敵にしています。パウロはかつてその先頭にいたわけですから、パウロ自身そのことをよく知っています。ユダヤ教の会堂の席に着くということは、敵のど真ん中に入っていくのと同じで、ことによれば袋だたきに遭う、いのちの危険さえある。実際にこの後、彼らは町から追い出されてひどい目に遭うわけです。ヨハネがエルサレムに戻ったのは、こうなることを予想して恐くなったからではないかとさえ言う人もいます。

パウロは、会堂司から声をかけられたとき、臆することなく皆の前に立ち、いのちがけで福音を語り始めます。

## 2 救いのことばは、私たちに送られた

### 1) 私たち、アブラハムの子孫に

16節。「イスラエル人の皆さん、並びに神を恐れる方々、聞いてください。」26節ではこうも言います。「アブラハムの子孫である兄弟たち。」

二年前にイスラエルに行かせていただきとき、ユダヤ教の人たちが律法を守ることにいかに熱心であるかを見ました。それだけ旧約聖書を大切に思っているわけです。その点には本当に頭が下がる思いがしました。そんな人たちですから、自分たちイスラエル人はアブラハムの子孫であるということに強い誇りに思っている。クリスチャンも同じです。そこには何の違もない。自分たちはアブラハムの子孫である。パウロはユダヤ教とキリスト

教の共通の土台である旧約聖書を据えて、そこから語り始めます。

## 2) 旧約に書かれている救い主

問題は、旧約聖書のどこに救い主イエス・キリストのことが書かれているのかです。パウロは、当時の最も優れた学者のもとで旧約聖書を暗記するくらい徹底的に学んだ人です。それだけ学んだのに、旧約聖書がイエス・キリストを指し示していることに全く気がつかない。むしろイエスは自分たちの敵だと思い込んでいた。ところが彼は、ダマスコに住むクリスチャンを迫害しようと向かっていた途中で、強い光に照らされて倒れてしまう。どうなってしまうのかと戸惑っていたときに、彼は生きておられる主の声を聞きます。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」あなたは神を迫害しているのだと言われた。愕然としました。それまで、正しい人となるために律法を守るべきである、それが旧約聖書の教えであると思い込んでいた。それが神を敬うことだと信じていた。だから、律法を守ろうとしないように見えるキリスト教は神をけがすともんでもない宗教だと思い、迫害していた。ところが神は、そのようなあなたは神を迫害している、というまったく天地がひっくり返るようなことばをお語りになった。

そのときから彼は旧約聖書の中に救い主イエスがすでに語られていたことに目が開かれます。神は私たちが苦しめるために律法を与えたのではない。いや、律法を守れなくて苦しんでいる私たちが苦しみから救い、贖い出すために、神ご自身が苦しみ of 真正面に立ってくださる、そのような神の計画が旧約聖書に書かれていたことを教えられていくのです。

## 3) ダビデの子孫から救い主イエスを送ってくださった

パウロは22、23節でこう語ります。「そしてサウルを退けた後、神は彼らのために王としてダビデを立て、彼について証しして言われました。『わたしは、エッサイの子ダビデを見出した。彼はわたしの心になつた者で、わたしが望むすべてを成し遂げる。』神は約束にしたがって、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主イエスを送ってくださいました。」

二重かぎ括弧ところは、旧約聖書の詩篇や第一サムエル記、イザヤ書に書かれていることばをまとめて引用している所です。会堂にいる人たちならばみな知っている。彼らも神がダビデの子孫から救

い主を送ってくださることを信じています。そこまでは問題ない。問題なのは、あの十字架で死なれたイエスこそが、神が送ってくださった救い主であると認めるのか、認めないのか。そこがポイントになります。

## 4) 洗礼者ヨハネの証言

そこでパウロは、洗礼者ヨハネのことを取り上げます。イスラエルの人たちは先ほども言ったようにずっと救い主を待ち望んでいましたから、洗礼者ヨハネが荒野に現れたとき、人々は、ヨハネがキリストではないか、と考えたわけです。そこでヨハネは、「私はその方ではありません。見なさい。その方は私の後から来られます」と言う。それで人々は、ヨハネはキリストではなく、ヨハネの後に来られるキリストを指し示した預言者であったことを知った。当時のイスラエルの人たちは、そのことは共通理解として持っていた。パウロはそのことをまず確認してから、イエスと呼ばれる方が救い主であると語っていくのですが、それはまた次回に触れることになります。

## 3 神の救いに遅すぎるということはない

### 1) なぜ待たされるのか

神はイスラエルの民を選び、救いのご計画を少しずつ明らかにしていけます。逆らい続けるイスラエルに神は忍耐されながら、ダビデを選び、ダビデの子孫としてやがて救い主を送るのだと語ります。そう語ってから千年後にイエスが来られ、約束を成し遂げられました。アブラハムから数えれば二千年、ダビデから数えても千年、イスラエルの民は待たされました。来たと思ったら、今度はその救い主を十字架で殺してしまいます。いったい神のご計画とは何だろうかと考えます。

まず人の側からです。どうしてこんなに待たされるのか。いつ来るか分からない救い主を待つて何の意味があるのか。私たちの待てる時間は、今日か明日かなのです。それ以上待つてももう遅い。手遅れだ。それが私たちの常識です。しかし神は待ちなさいと言われます。たとえ手遅れだと思っても、なお待ちなさい。ふつう、こんな理屈は通りません。

でもこう考え見たらどうでしょう。神ご自身はどれほど私たちのことを待っていたのでしょうか。それこそ、神の方が私たちよりもずっと忍耐しておられたことに気がつきます。

### 2) なぜ救い主は殺されるのか

そして神の側からの疑問です。それほど忍耐強い神が、私たちを救うために救い主を送ってくださった。ところが、救おうとした人たちの手によっていとも簡単に殺される。こんな理不尽な話があるのか。そう、理不尽です。でも神はその理不尽な方法を使って、私たちを救おうとするのです。十字架で殺されたら、もう手遅れだ。でも神は手遅れではないと言うのです。この方が死からよみがえられたのだから、遅すぎると言うことはない。だからあなたがたは待ち続けなさい。私たちの目には、遅すぎると思うかもしれない。でも神の目には遅すぎると言うことは絶対がない。あなたは必ず救われる。苦しみの中から救い出されるのだから、待ちなさい。

### 3) 死からよみがえられたのならば

アブラハムは救い主を信じていました。でも彼は墓に葬られました。ダビデも自分の子孫のなかに救い主が来られることを信じていましたが、彼も墓に葬られました。アブラハムもダビデも遅すぎた、手遅れだったのか。いいえ、手遅れではない。彼らは死からよみがえる。というのは、パウロは自分の耳ではっきりと、生きている主の御声を聞いたのです。はっきりと心の内に響いてきた。あの十字架で殺され墓に葬られた主は、本当によみがえられた。パウロはそのことを身をもって知っているから、堂々と語ります。自分は、救い主を十字架で殺した者だった。でも主はその罪を赦し、むしろこの救いのみことばを語りなさいと、こんな罪人のかしらである自分を送り出してくださいました。

今日の前に苦しみがある方、試練の中におられる方。手遅れだと思うこともあるでしょう。でも神には手遅れということばはない。必ず、すべて元に取り戻すことができる。だから信じ続けなさい。神は語ってくださいます。